

『伝記物語』に見る作家の「真実」*

丹 羽 隆 昭

I

ホーソーン (Nathaniel Hawthorne:1804-64) の『伝記物語 (Biographical Stories for Children)』(1842) は、明治の昔から我が国に紹介され、英語のテキスト¹として重用されたり、その翻訳²を通して西洋文化、特にキリスト教思想の普及に供されたりもした、いわばお馴染みのアメリカ文学の小品であって、現在ではともかく、半世紀前にはおそらくホーソーンにあって『緋文字 (The Scarlet Letter)』(1850) とともに日本では最もよく知られた作品だったであろう。

* 本稿は平成 14 年 11 月 9 日に行われた京大英文学会にて口頭発表した原稿に加筆修正を施したものである。

1 北星堂版は近年まで刊行されていた。また昭和 30 年代を中心に、我が国の大学入試英語 (英文解釈) 問題には『伝記物語』を出題ソースとしたものが目立った。文法的破綻が少なく、文体も整ったホーソーンの記事は高等学校や大学教養課程で歓迎されたと言える。

2 図版 1・2 参照。図版 1 は明治 19 年東京の警醒社書店から出版された篠田昌武訳『英米五傑・傳記物語』(五傑とあるのはクリスティーナの物語を削ってあるから)。図版 2 は明治 39 年東京の金刺芳流堂発行の吉田潔訳『傳記物語』。いずれも仙台白百合女子大学の阿野文朗氏の御厚意による。

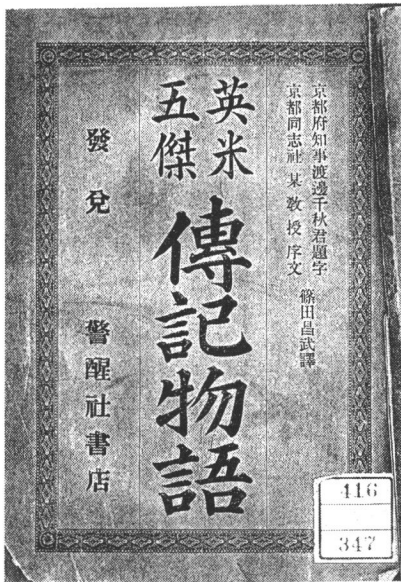
それゆえこの『伝記物語』は、早い時期の我が国の読者にホーソーンというアメリカ作家のイメージを植え付けるのにかなりの貢献をしたと言えようが、作品としての出来映えとなると、この作家が同じく「子供向け」と銘打って発表した他の何編かの物語集³と比較しても、決して優れたものではなく、近年研究者間であって議論の対象になることはまずない。そもそもこの『伝記物語』は、取り上げられる「偉人」や挿話の選定、さらには「子供向け」という表示の適切性などに関して読者に疑問を抱かせ、いくつかの点で均衡と整合性を欠いているのだが、これについては第三節で触れることとする。

しかし、『伝記物語』で見過ごせないことは、この作品が刊行された1842年の時点においてホーソーンの心から離れなかった創作上あるいは生活上の問題が、適当に変形された形で、つまり作家自身の愛用語で言えば、彼の「心の真実 (the truth of [his] human heart)」⁴として、収録された6人の「偉人」たちの挿話ひとつひとつにしっかり影を落としているということである。つまり、ホーソーンが書いた「偉人」たちの伝記である『伝記物語』には、興味深いことに、作家自身の伝記的「事実」ではないが、伝記的「真実」のいくつか透けて見えるということなのである⁵。

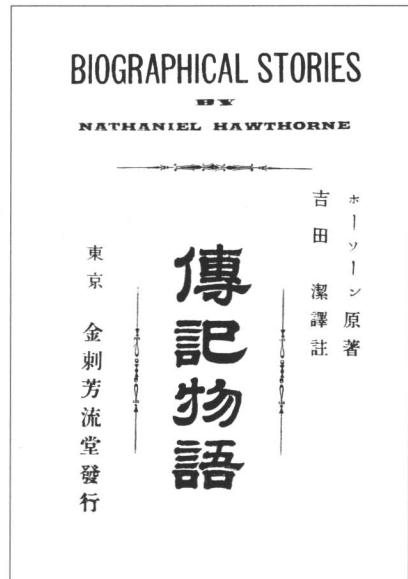
3 ホーソーンの子供向け物語集としては *Grandfather's Chair, Famous Old People, Liberty Tree* (いずれも1841年発表で、1851年に *The Whole History of Grandfather's Chair* として纏められ *True Story of History and Biography* の一部として発表) や、*A Wonder-Book for Girls and Boys* (1852)、それに *Tanglewood Tales, for Girls and Boys* (1853) などがあるが、現在では『伝記物語』も含め、いずれもオハイオ州立大学出版局刊行の「ホーソーン没後百年記念全集」、いわゆる「センテナリ版」の第六巻 (*True Stories*) に収録されている。

4 Nathaniel Hawthorne, "Preface to *The House of the Seven Gables*," *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, II, (Columbus: Ohio State Univ. Press, 1962), 1. 以下この「センテナリ版」はCEと略し、この版からへの引証は巻番号を添えて本文で行う。『伝記物語』はCE, VI になる。

5 ここでいう「真実」とは、事実に想像力のフィルターをかけ、修正、脚色、誇張などを施したもの、いわば人間の内的リアリティーを指す。「ロマンス」作家ホーソーンが実践した文学は、こうした内的リアリティーを何よりも重視している。



図版 1



図版 2

II

議論に入る前に、まず『伝記物語』の概要を確認しておこう。物語は、テンプルという名の一家 (the Temples) で、次男エドワード (Edward) が重い眼病に罹り、失明の恐れさえるため、四六時中両目を眼帯で覆っていなければならなくなり、相当に落ち込んでいた時、その不安と退屈を紛らわそうと、父親のテンプル氏が、過去の「偉人」たちの子供時代の挿話を次々に語って聞かせるという設定で、これが物語の外枠を成している。すなわち、一家団らん場で父親が、次男を主たる対象とし、その他の子供たちや母親をも聴衆に加えて行う「偉人」たちの幼き日々の連続した挿話が『伝記物語』を構成する。

父親テンプル氏が語るのは、まず初期の頃のアメリカを代表する画家で後にイギリス王室の宮廷画家として活躍したベンジャミン・ウェスト (Benjamin West: 1738-1820)、万有引力の発見で知られる天才科学者アイザック・ニュートン (Isaac Newton: 1642-1727)、文人批評家で辞書編纂家のサミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson: 1709-84)、清教徒の軍人で革命家オリバー・クロムウェル (Oliver Cromwell: 1599-1658)、アメリカ建国の父祖のひとりで「ミスター・アメリカン」の異名を持つベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin: 1706-90)、それにスウェーデン女王クリスティーナ (Queen Christina: 1629-89) の計6人で、彼らの (主として) 幼き日のエピソードに焦点が当てられている。

ウェストに関しては、7歳の時に揺り籠で寝ている赤ん坊の顔をこっそり紙に写し取ろうと赤黒二色のインクで描き、母親に褒められた挿話、そして熱病で伏していて偶然カメラ・オブスクラの原理を発見した挿話を中心に、その後めきめき才能をあらわし、周囲の人々の好意と賢明な判断に支えられ、欧州に渡っても謹厳純朴なクエーカーの教えを守り、当代の代表的画家になった様が語られる。ニュートンに関しては、幼い頃から器用な少年が時計や水車を作っ

た挿話と、やがて世界を支配する法則を学ぼうと大学に入った彼が、飼犬ダイヤモンドに長年の研究成果を灰にされてしまった時に、その飼犬に対して辛く当たらなかったという挿話を中心に、この天才科学者の一途さ、優しさ、謙虚さを語る。ジョンソンの物語は、彼が若い頃、書籍の行商を生業とする病弱な父親の「今日はわしに代わって近くの町で本を売ってくれ」というたつの願いを、自分の高慢と肉体的劣等感ゆえに拒絶する挿話と、その親不孝への罪意識を背負ったまま五十年後、イギリス随一の碩学となった彼が、ある日父の本売りの屋台が置かれた町の広場で「懺悔 (penance)」を行う挿話から成り、過ちを改むるに憚ることなかれという教訓を付加する。クロムウエル物語は、英国王ジェームズ一世の我が儘で高慢な王子（後のチャールズ一世）に対し、王の忠臣の甥に当たるノール、すなわち幼き日のクロムウエルが、こんな奴に敬意を払う必要はないとして跪きもせず、さらには相手が先に殴ったからと王子を殴りつけて怪我を負わせる挿話を中心に、愚かな優越感を改めることがなかったために処刑台に送られたチャールズと、同胞イギリス人の権利と自由のために戦って、貧しい者、虐げられた者に支持されたクロムウエルとに言及する結論に至る。フランクリンに関しては、公共の福利のために他人の建築現場から資材を失敬して波止場を作った幼き日のフランクリンを、目的の達成はいつも人に迷惑をかけない、正しい手段で果たすべきだとして叱責する彼の父親と、それに素直に従う息子フランクリンの挿話である。最後のクリスティーナの物語は、六歳の時に娘を溺愛した父親が死に、無理矢理女王の地位に就かせられた彼女が、周囲の者たちから男同然に育てられてゆくいきさつを語り、学問は身に付いたが愛すべき女らしさを持たず、身体の清潔さにも欠け、その結果周囲から疎んぜられて寂しい一生を送った様子を述べ、女性は女性としての本分を全うすべしとする教訓が付される。

子供が偉人たちの子供時代の挿話に親しんでおけば、成長してから同じ目線で偉人たちと接することが出来るというのが父親テンプル氏の考えだという (CE, VI, 220)。いずれの「偉人」のエピソードにも、(まずはテンプル家の聴衆に向け

られ、最終的には読者一般に向けられた) 教訓的メッセージが付与されているが、それらは「謙虚さ (humbleness)こそ美德」「(逆に言えば「高慢」こそ罪)、そして「心の目 (inner vision) を用いて物を見よ」という二点に収斂するように思われる。

III

第一節で『伝記物語』の疑問点に言及したが、それらを挙げると以下のようになる。

(1) まず「偉人」6人の選定があまり常識的ではない。ニュートン、ジョンソン、フランクリンの三者は客観的に見て、「偉人」として選ばれる資格が十分にあらう。いずれも英米の18世紀を代表する偉大なる知識人である。しかし、ウェスト、クロムウェル、クリスティーナとなると果たしてどうか。特にクリスティーナは、その描かれ方が雄弁に物語るように、決して「偉人」とは言えず、その知名度自体にも疑問符が付く。ウェストやクロムウェルに関しても、あまたの中からわざわざ「偉人」として取り上げるほどの人物かどうか、はなはだ怪しい。これら6人の顔ぶれは、したがって、かなり偏った奇妙な選定のように思われるが、このような人選にはどのような意味があるのだろうか。

(2) 物語の「序文」で、子供たちに過ぎ去った時代の偉人を紹介するいちばん良い方法は「そうした偉大な男女の＜子供時代＞を紹介すること (to begin the acquaintance with the childhood of those great men and women [Italics mine])」(CE, VI, 213) だと作家は述べており、その趣旨はうなずけるし、たしかにウェスト、クロムウェル、フランクリン、クリスティーナの4人に関しては、彼らの「子供時代」のエピソードが中心的に語られている。しかしながら、ニュートンに関しては「子供時代」のものとともに、大人になってからのエピソードも含まれており、さらにジョンソンの物語となると、そこで語ら

れているのが彼の「子供時代」とはもはや言えない。ジョンソンが最初に登場するのは、図体の大きな若者としてであり、母親が、お前はもういい大人になったんだから (You are a great boy, now)、お父さんに代わって町へ行き、本を商ってよい頃だよ、というほどの年齢⁶に達している (CE, VI, 242)。さらに、この物語のハイライト、すなわちユトクセターの町の広場で「ペナンス」を行うエピソード (CE, VI, 245-48) に至っては、それから「50年後」、要するにジョンソンの最晩年に他ならない。これらを見ると、「序文」にいう「子供時代 (childhood) の紹介」なるものは、あまり厳格には守られていないのである⁷。しかも「子供時代」を逸脱して語られ、いわば例外的なニュートンとジョンソンの物語、なかんずくジョンソンの物語が、ある意味ではホーソーン文学のエッセンス⁸を含むものとして、この『伝記物語』中の白眉となっていることを思えば、この不自然さは気にかかる。

(3) 表題は『子供向けの伝記物語 (*Biographical Stories for Children*)』と謳っており、「子供たち」を聴衆とした伝記物語集という体裁なのだが、聴衆は果たして本当に「子供たち」なのであろうか。語り手が外枠の部分で述べてい

6 Johnson が penance を行ったのは死の数年前である。Boswell の *Life of Johnson* では、1784 年 11 月の記載の中に、Johnson が Henry White なる人物に向かって「今から数年前 (a few years ago) にペナンスをした」と語ったとある。Johnson の死は 1784 年であるから、これより数年前、仮に 1780 年頃だとしてもそれから「50 年前」といえば、1730 年頃となり、1709 年生まれのジョンソンが父親に逆らったのは 21 歳の時のこととなり、とても「子供時代」には当たらない。

7 ちなみに OED は“childhood”を「男子にあっては、誕生から 14 歳まで、女子にあっては誕生から 12 歳まで」と定義している。Childhood: The state or stage of life of a child; the time during which one is a child; the time from birth to puberty. (Formerly with pl.) cf. puberty: In England the legal age of puberty is fourteen in boys and twelve in girls. [italics mine] (OED)

8 長年にわたる罪意識に懊悩する人間の姿こそホーソーン文学のエッセンスであるが、ジョンソンの物語同様に主人公が「ペナンス」を行う例としては、もちろん、『緋文字』の牧師ディムズデイル (Arthur Dimmesdale) がある。

るのは、病気で視力を絶たれた次男エドワードが自分の辛い試練を耐え抜くには、家族がみな彼をやさしく気遣ってやらねばならないこと、彼が苦難から学ぶ教訓が「人間は相互に依存し合っている存在なのだ、ひとりでは生きられぬことを知る謙虚さが大切だ」ということであり、また「肉体としての目は見えなくとも、大切なものは心の目で見よ」ということである。確かに作品は、子供を意識した比較的平易な言葉で書かれてはあるものの、このような教訓は子供（聞き手のエドワードは8～9歳という年齢設定）にはどう見ても厳しすぎるものであり、むしろ明白に大人向けのメッセージだと言ってよいのではないか。

またこれに関連してもうひとつ、『伝記物語』で非常に気になる事実は、すべての物語に「名声（「fame / renown, etc.）」という語、本来「子供たち」とってはあまり関心がないはずの語が、いわばキーワードとして、いくたびとなく登場し、しかもその「名声」なるものへの言及が唐突かつ不自然になされるケースが目立つことである。これはいったい何故であろうか。例えば最初のウェストの物語では、その終わり頃になって、語り手が「我々はみなベンジャミン・ウェストのように天分を最大限活かそうではないか。そうすれば神慮の恵みを受けて、何らかの立派な目標に到達できることだろう」と言い、その直後に突然何の脈略もなく、「名声については、獲得しようがしまいが大した問題ではないのだ（As for fame, it is but little matter whether we acquire it or not [italics mine]）」（CE, VI, 229）と付け加える。ニュートンの物語でも「名声」という語がいくたびとなく登場し、かの大科学者が死んだ後、あの世でも依然として神の無限の知恵と善意を探究し続けていると述べた後で、「彼は名声をこの世に置いていったが、その名声は、まるで彼の名が真夜中の空に輝く星の作り出す光の文字で書かれているかのように永続的なものだ（He has left a fame behind him, which will be as endurable as if his name were written in letters of light, formed by the stars upon the midnight sky [italics mine]）」（CE, VI, 237）として、脈絡上少々不整合を来すほど「名声」に拘った言及をしている。フラン

クリンの物語では、「彼の政治的貢献も科学的発見も、重要と言えば重要であろうが、彼の獲得した〈名声〉すべてに繋がったかどうかはよく分からない」としたうえで、「彼の名声に最も貢献したのは、彼の仕事のうち最も謙虚なもの」、つまりあの植民地時代のベストセラー啓蒙書『貧しいリチャードの暦 (*Poor Richard's Almanack*)』(1732-57)の作成だったとテンプル氏が(フランクリン批判を繰り広げる)長男のジョージに向かって述べている⁹。そしてジョンソンの物語では、「彼(ジョンソン)は今や文学的名声の極みにあった。だが彼の名声のすべてをもってしても、生涯にわたって彼を苦しめてきた苦い記憶を払拭し得なかった (He [Johnson] was now at the summit of literary renown. *But all his fame could not extinguish the bitter remembrance, which had tormented him through life.* [italics mine] (CE, VI, 248))」¹⁰という奇妙なコメントが読者の注意を引く。罪の記憶を消すのは通常「名声」ではなく、「時間」と考えられるにもかかわらず、あくまでも「名声」が強調されるのである。

(4) ニュートンの物語を除くと、すべての物語において、子供へ重要な影響力を及ぼす「父親」あるいは「父親代理」の存在にスポットが当てられている。ニュートンの物語には父親が登場しないが、これはもちろん、ニュートンが生まれる前に父を亡くしており、母親にも捨てられ、母方の祖母の手ひとつで育てられた事実上の孤児だからに他ならない。しかしその「父なし子」ニュ

9 I [Mr. Temple] doubt whether Franklin's philosophical discoveries, important as they were, or even his vast political services, would have given him *all the fame which he acquired*. It appears to me that *Poor Richard's Almanack* did more than any thing else, towards making him familiarly known to the public. As the writer of those proverbs, which Poor Richard was supposed to utter, Franklin became the counsellor and household friend of almost every family in America. *Thus, it was the humblest of all his labors, that has done the most for his fame.*" [italics mine] (CE, VI, 273-74)

10 He [Johnson] was now at the summit of literary renown. *But all his fame could not extinguish the bitter remembrance, which had tormented him through life.* [italics mine] (CE, VI, 248)

ートンの物語では、父親の不在が「天なる神」によって補われているのである。「偉人」の「子供時代」を語ろうという以上、父親に言及があるのはある意味では当然かもしれないが、登場するのがすべて父親あるいは父親代理で、人の「子供時代 (childhood)」に同じく—あるいはそれ以上に—重要な影響力となる母親が、いずれの物語にも登場しない。これほど「父親」が前面に押し出されるのは何故か。

また外枠としてのテンブル一家においても、「父親」テンブル氏が、息子エドワードをはじめとする子供たちに「偉人」たちの物語をしながら、「父親」としての自分の家庭における役割、特に子供たちにとっての自分の存在意義について自問しているふしが窺える。

このように、『伝記物語』は、(1) 収録された偉人の選定が常識的でなく、(2) 偉人の「子供時代」を語るという設定も少々破綻しており、(3) 子供をターゲットとして謳いながら、その実「名声」などというあまり子供の関心事でないことに異常なまでに拘って、(4) さらには、家庭における父子関係ばかりが着目される、という構成上も内容上も一風変わった「偉人伝」となっている。

IV

しかしながら、こうした『伝記物語』の一風変わった性格は、ホーソーンがどのような状況の下にこの作品を書いたのか、つまり、この「伝記」的作品、作家自身の「伝記」と並置しつつ考えれば、充分納得のゆくものであり、偏りや不整合と映る部分もそれなりの必然性、一貫性を持っているように思われる。

『伝記物語』は 1842 年の出版であるが、これは 1838 年にソファイア・ピーボディー (Sophia Peabody) と婚約を交わしていたホーソーンが、4 年の長きにわたる婚約期間を経て、やっと結婚に至った年に当たる。出版前年の 1841 年には、結婚生活の安定をを考えて 1,000 ドルを投資し、当時評判をとっ

た農業共同体「ブルック・ファーム (Brook Farm)」に参加してはみたものの、半年ほどで幻滅して去るという苦い経験を味わい、せっかく蓄えた大金も失ってしまっている。つまり 1842 年は、極度の経済的困窮の中で結婚生活に踏み切った年であった。前年刊行の二つの子供向け物語集『お祖父さんの椅子 (Grand-father's Chair)』と『有名な昔の人たち (Famous Old People)』に続いて、この年『伝記物語』を三つ目の子供向け物語集として出版したのも、当時比較的同じようなジャンルのものがよく売れたことに着目しての生活費稼ぎであった。長い居候的生活から、形の上でこそ「独立」は果たしたものの、「旧牧師館」での新生活の経済基盤は脆弱そのもので、当時のアメリカの実利的社会風潮や、アメリカでの著作権未確立による英国作家ものの海賊版横行という出版事情の下での文筆稼業はきわめて厳しいもので、このことは短編『原稿の中の悪魔 ("The Devil in Manuscript")』(1835) などに書かれてあるとおりである。

さらにホーソーンにとって結婚生活は、経済的な問題の他に、もうひとつ別大きな不安をも意味した。結婚により自分が戸主として、父親として家庭の中心に位置し、子供たちを育ててゆくことになるのだが、幼い時に父を亡くし、母方マニング家に引き取られて育った彼には、父親が(テンブル氏のように)家庭の中心として存在感を持つ姿を、実感をもってイメージすることができなかった。父親の顔すら知らぬ彼にとっての父親代わりは、出戻りとなった母の弟、実業家ロバート・マニング (Robert Manning) であって、この「代父」マニングは、ホーソーンが成人するまで確かに何かとよく面倒を見てくれたが、地元の有力者で実利主義の見本のようなこの叔父に、作家は畏敬の念のみならず強い反撥もまた抱いていて、この叔父の前に出ると絶えず自分が選択した文学の道に対して激しい両面価値的感情 (ambivalence) を抱き続けていたと、いくつかの評伝¹¹は教える。さらにそのうえ、『伝記物語』出版の 1842 年は、

11 代表例は Gloria Erlich, *Family Themes and Hawthorne's Fiction: the Tenacious Web* (New Brunswick: Rutgers Univ. Press, 1984) である。邦訳は『蜘蛛の呪縛—ホーソーンとその親族』丹羽・大場・中村訳、開文社出版、2002 年。

作家が「独立」した年であると同時に、そのいささか煙たい叔父が他界した年にも当たっている。「サミュエル・ジョンソン」の物語が作品中特に異彩を放つのは、ホーソーンがジョンソンの愛読者であったからでもあろうが、それ以上に、ジョンソンと父親マイケル氏との父子関係が、どこかホーソーンとマニング氏（代父とはいえ）のそれと奇妙にも重なるからではないか。「代父」が死んだ年に出版された『伝記物語』には、文筆で身を立てるべく、必死に「名声」を得ようとした者が抱えた問題意識、自らがそのモデルを持たぬ「父親」として作ってゆかねばならぬ家庭への不安など、出版時点において作家を悩ませた彼の「心の真実」が、直接間接にその姿を落としていると考えれば、『伝記物語』の一見奇妙な特性もまた説明がつくのではなかろうか。

V

さてそれでは発表時期における作家の関心事が、「事実」としてというよりは「真実」として作品に表れている実態を少々検証してみることとしよう。これは、まず冒頭の「ベンジャミン・ウェスト」に既にかなり明白に表れていると言える。ウェストの挿話が提示する「真実」とは、要するに、ウェスト一家が属していたクエーカー共同体に見られる、芸術的天分に恵まれた者への賢明で度量ある理解ということに他なるまい。語り手は、周囲の理解に恵まれ、自身も謙虚だったウェストが、平穩で名誉に満ちた長い「お伽ばなしさながらの素晴らしい人生 (his life ... almost as wonderful as a fairy tale)」を送ったと述べたのち、「我々はみなベンジャミン・ウェストのように天分を最大限活かそうではないか。そうすれば、神慮 (Providence) の恵みを受けて、何らかの立派な目標に到達できることだろう」(CE, VI, 229) と続ける。ウェストについて語るホーソーンが、筆を執りながら頭に描いていたのは、芸術家が安心して創作に専念できる理想的状況と言ってよい。この状況の中核をなすのは、7歳の少年ウェストの驚くべき才能を認め、画家になることこそ神慮にかなうとして

ウェストの父親を説得し、気前よく少年に絵具箱、画布そして風景版画をプレゼントした、父の友人でフィラデルフィアの豪商ベニントン氏（Mr. Pennington）と、ウェストが長じてロンドンに赴き、宮廷画家となった際の国王ジョージ三世とであり、彼らが体現するものは、芸術家にとっての庇護者（パトロン）である。そのウェストの挿話を語るホーソーンが、しかし、まさにそれとは対極の状況にあったのは周知のとおりである。芸術家とパトロンという関係は前近代的なものであり、資本主義の台頭によって芸術分野にも市場原理が導入され始めたホーソーンの時代にあっては、すでに昔語りと化してしまっていた。作家、芸術家は自分の作品を商品として市場に送り、それを需給バランスにおいて売り捌かねばならなくなっていた。消費者たる読者のニーズにも一定の気配りをせねばならず、作品が売れなければ減びるしかないという時代に突入していたのである。著作権という考えもまだ確立していなかったため、イギリスの著名作家たちの作品が海賊版としてまかり通り、リスクを極端に嫌った当時のアメリカ出版界で、アメリカの若い作家が市場における勝者になるのは至難であった。そういう時代において、天分を認められ、芸術の本場ヨーロッパに渡り、庇護者の下で才能を発揮し、名声を獲得し、平穩のうちに長寿を全うし、「お伽ばなしさながらの素晴らしい人生」を送ったアメリカの芸術家ウェストとは、その幸せな挿話を語る 1842 年当時のしががない短編作家ホーソーンにとって、まさに羨望の対象以外の何物でもなかったに相違ない。「ベンジャミン・ウェスト」という『伝記物語』の冒頭を飾る挿話は、そのように考えれば、それを書く主体たるホーソーンが、おそらくは夢の中で求め、しかるに現実には獲得不可能であった（芸術家としての彼にとって）理想的創作状況の例示であり、自分の現実を裏返してウェストに投影した物語と考えてもよいであろう。しかしながら、その後に唐突に置かれた「名声については、獲得しようがしまいが大した問題ではないのだ」という結び文句は、名誉欲の強い聴衆への教訓とはなるかもしれないが、それを述べる作家自身の本音とはまったく正反対のメッセージである。市場原理が幅を利かす弱肉強食の出版界で、

自分が活字で生きてゆくために、この時期のホーソーンが何にもまして求めていたのは、他ならぬ「名声」、つまり消費者たる読者による彼の認知だったからである。ここに見られる「名声」への奇妙で唐突な言及にこそ、作家としての地位の確立を何よりも欲していたホーソーンの本音、つまり彼における「心の真実」がちらりと顔をのぞかせたものと見るべきであろう。

なお付言すれば、ホーソーンは、ウェストの絵を地元セイラムの図書館などで見てよく知ってはいるが、その絵を「冷たい (frigid)」¹²と評しており、必ずしもウェストに好印象は持っていなかったようである。

次の「アイザック・ニュートン」から「ベンジャミン・フランクリン」までの挿話に関しても、ほぼ同様なことが言える。これらに込められた「真実」とは、みな何らかの意味で、執筆当時のホーソーンの脳裏から離れることのなかった一多くは創作上の一問題意識を反映したものである。「アイザック・ニュートン」における「真実」とは、父親を持たず（神を父親とし）母方の祖母に育てられた、気心の優しい天才の、謙虚で誠実な真理追求の人生である。これは4歳で父親を亡くし、母方の家の人々によって育てられ、高踏的で派手な超越主義文芸隆盛の中で、「ロマンス」という古めかしくも地味な物語形式で「人間の心の真実」を追求したホーソーンその人と重なり合う部分を持つ。

「サミュエル・ジョンソン」の「真実」は、高慢が生んだ父親への息子の親不孝と、それから生じた生涯におよぶ罪意識というもので、晩年におけるペナンスという形でクライマックスを迎える。高慢が罪を生み、その罪が人を長年苛み、懺悔へと至らしめるというパタン、高慢のつけは結局自らに及ぶというパタンは、いわゆる「許されざる罪 (the Unpardonable Sin)」を終生の主題としたこの作家の代表的心象風景であり、かつまた「サミュエル・ジョンソン」では親不孝という形を取るが故に、ホーソーンとその母方の叔父マニングー

12 [West] had a gift of frigidity, a knack of grinding ice into his paint, a power of stupefying the spectator's perceptions and quelling his sympathy, beyond any other limner that ever handled a brush. (CE, V, 230) cf. *American Notebooks*

ホーソーンが結婚した年であり、『伝記物語』刊行の年でもある 1842 年に他界している一とのアナロジーも認められ、ジョンソンのペナンスは、ホーソーン自身のそれと重なってくる¹³。「彼の名声のすべてをもつてしても、生涯にわたって彼を苦しめてきた苦い記憶を払拭し得なかった」という奇妙なロジックも、やっと世間に認知され始め、独立も果たしたホーソーンが、恩返しのひとつだにしないうちに他界してしまい、罪滅ぼしのしようもなくなってしまう叔父との関係を、ジョンスンとその父との関係に重ね合わせているように感じられるのである。

「オリヴァー・クロムウェル」の真実も「サミュエル・ジョンスン」と同じく、高慢の代償ということに他ならないが、この挿話では国王ジェイムズと王子チャールズ、そして国王の忠臣でクロムウェルの叔父サー・オリヴァーとノール（つまり後のクロムウェル）との二組の父子関係（および擬似父子関係）が提示されている点に特徴がある。ノールと呼ばれた幼い日々のクロムウェルが国王ジェイムズの面前で我を張って叔父に赤恥をかかせ、苦しめている構図や、王子チャールズがその愚かしさから父王ジェイムズの「強情なイングランド国民を専制的に治めようという気が起こった時には、今回ノールに殴られて鼻血を出したことを思い出すとよい」という諫めを活かせず、結局自らの死を招くという解釈に、作家とマニングとの退引ならざる関係が重なって見える。

「ベンジャミン・フランクリン」の真実は、「サミュエル・ジョンスン」および「オリヴァー・クロムウェル」とは逆に、父親の忠告を素直に受け入れる賢明な息子であって、ホーソーン自らは実現できなかった理想的息子像の提示ということになる。また「名声」に関しては、この挿話の後に置かれたテンブル氏の言を通して、ホーソーンがフランクリン—政治家、外交官、発明家など、ありとあらゆる分野で活躍した万能主義者—の「名声」が主として『貧しいり

13 この問題に関しては拙著『恐怖の自画像—ホーソーンと「許されざる罪」』（英宝社、2000 年）の補章「ホーソーンの巡礼行脚」を参照されたい。

チャードの暦 (*Poor Richard's Almanack*)』による「文学的」な「名声」だとしている点が、やはり注目される。

VI

「女王クリスティーナ」が6人の「偉人」のうちに含まれるのは、前述のとおりいかにも奇妙である。しかもこの挿話が描くクリスティーナは、「彼女が身につけた女性らしい心得はダンスだけだった (*dancing was the only feminine accomplishment with which she had any acquaintance*)」(CE, VI, 281)とされ、テンブル氏の妻も「実際彼女は女性の悲しい見本でした (*[She] was a sad specimen of womankind, indeed*)」と言うなど、ほとんど酷評の対象ですらある。この意味において「女王クリスティーナ」の物語は『伝記物語』中の異端的存在であり、篠田昌武の邦訳がこれを削除して『英米五傑』とした理由もうなづける。作品の最後にこのような挿話を置いたのは、若い女性読者をもターゲットとして作家が意識していた表れであろう。クリスティーナを学問では「男勝り」、服装はいかにも慎みを忘れたもので、手も身体も洗わず不潔にして恥じなかったとしたうえで、女子は—とりわけ新世界アメリカの女子は—「女子が持つべき繊細な上品さと穏和な美徳 (*the delicate grace and gentle virtues of a woman*)」を体得すべきであり、決して女王クリスティーナのようになってはならぬ、と言う。明らかに「女王クリスティーナ」の挿話は、反面教師としての「偉人」、いや「女性」という側面を持つ。

国王チャールズ一世の首をはねたクロムウェルを最厲することからも察せられるが、ホーソーンは貴族主義を代表する王族に対して批判的姿勢を取り、アメリカが国是とする民主主義の擁護者というスタンスを見せる傾向にあり、スウェーデンの「女王」クリスティーナに対して厳しいのもそうした姿勢と通じるものがあると言えよう。ただ、彼女の「男勝り」という特性に含まれる「真実」は、ほとんど言うまでもないが、ホーソーンの商売敵として出版界に君臨

していた安物小説書きの女流作家たちへの彼の批判¹⁴であろう。

しかしこれらとともに、「女王クリスティーナ」でもやはり着目せねばならぬのは、父子の関係であって、この物語の場合、父親で「名声高きギュステイヴァス (the renowned Gustavus)」がその娘クリスティーナを溺愛し、甘やかして、女性としての教育に失敗したという点であろう。1842年当時、新婚のホーソーンにはまだ子供はなかった。しかしやがて父親となるはずの彼には、父親としての子育てには喜びとともに大きな不安が付きまとった。2年後に娘ユーナ (Una) が誕生し、その後一男一女に恵まれて三人の子の「父親」となるが、案の定、妻ソファニアの育児方針には内心賛同できず、『伝記物語』の父親テンブル氏とは異なって、家庭の建設には相当苦勞することになる。今日、ホーソーンの家庭経営は（「良妻賢母」ソファニアが作りだそうとしたイメージとは裏腹に）失敗だったとも言われる¹⁵。「女王クリスティーナ」は、興味深いことに、やがて作家自身が陥ることになる運命を、国王ギュステイヴァスとその娘のそれと重ねる形で、奇妙にも予兆する自己暗示的物語となっているのである。

14 ホーソーンは、その作家経歴の大半を通して、女性作家たちが安っぽく感傷的な大衆向け小説を書いて当たりを取っている様に強い反撥の念を抱いていた。例えば、初期のスケッチ『ミセズ・ハチンソン (Mrs. Hutchinson)』（1830）の冒頭部分には、昨今の出版界における「女性の野望」は著しく、やがて「インクのしみのついたアマゾンたちがライバルの男性作家たちを力づくで駆逐し、ベチコート軍団が勝ち誇ったようにこの分野（文学界）全体を席卷するだろう」（CE, XXIII, 66-67）と述べていることに発し、後年リヴァプールから出版人ティクナー (W. D. Ticknor) に当てた手紙（1855年1月19日付）での「アメリカは今や忌々しい物書き女どもに完全に乗っ取られている (America is now wholly given over to a d----d mob of scribbling women)」(CE, XVII, 304) に至るまで、一貫して女流大衆作家たちに批判的だった。

15 例えば、T. Walter Herbert, *Dearest Beloved: The Hawthornes and the Making of the Middle-Class Family* (Berkeley: Univ. of California Press, 1993)などを参照。

VII

冒頭でも述べたように、かつて我が国でホーソーンの代表作として歓迎された『伝記物語』も、現在では文学作品としても、英語のテキストとしても、そしてもちろんキリスト教思想紹介本としても、およそ顧みられることがなくなっている。確かに、そこに収められた6人の「偉人」たちの物語は、額面通り「子供」が読むにしてはその教訓が厳しすぎ、さりとて大人が読むにしては内容がいかに物足りなさすぎる。「偉人」たちの選定も常識的とは言えないし、個々の挿話も額面通り彼らの「子供時代」に限定されているわけではなく、すべてにわたって中途半端という印象を与える。一見したところ、やはりこれは丁寧に仕上げられた芸術作品ではなく、悪し様に言えば「生活費稼ぎ」の即製品という印象を拭いきれない作品である。

しかしながら、一家の主たる父親が、落ち込んでいる息子相手に、その反応を確かめながら次々に6人の「偉人」たちの若き日の挿話を語ってゆく構成を取る『伝記物語』は、その挿話のそれぞれがまた父親の子供（多くは息子）への影響力の重大さを核としており、さながら偉人における父子関係集という観を成す。なかでも「サミュエル・ジョンソン」は、父親（あるいは代父）への親不孝が生ぜしめる息子の側での強い罪意識という構図が、ホーソン文学すべてに通底する主題であるとともに、『伝記物語』出版時点でのホーソンとその「代父」マニングの関係とオーバーラップするがゆえに、ひときわ興味深いものであり、また実際に作品中もっとも精彩ある挿話となっている。

それとともに「名声」という語の頻出と不自然なまでの使用法に見られる、社会の認知への作家の必死なまでの渴望は、まだ必ずしも作家としての地位を確立し得たとは言えない¹⁶ この時期のホーソンの偽らざる本音を表すもの

16 ホーソンが作家としての地位を確立したのは、言うまでもなく『緋文字』という長編によるのであり、それは『伝記物語』発表から8年も後のことである。

として、読む者の心を少なからず痛めさせるほどである。そうした野心とそれに伴う危険を打ち消そうとするかのような、全編を通しての高慢への警鐘（謙虚さの勧め）や心眼で見ることの重要性（「事実」よりも「真実」を尊ぶ姿勢に通じる）、などの教訓も、作家として確固たる地位を求めて模索するホーソーンの「心の真実」を示すものの一環として意義深く、一風変わったこの『伝記物語』は、それこそ一風変わった作家の「伝記」として少なからぬ魅力を秘めていると、私は考えたい。